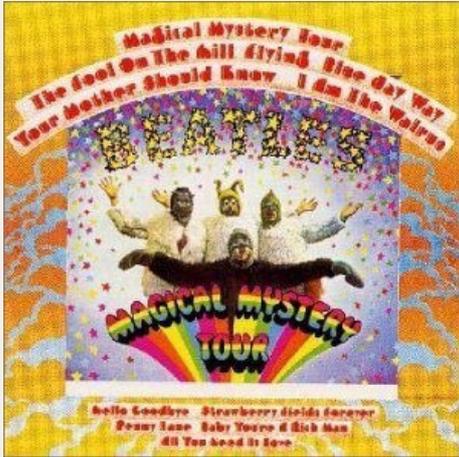




## vol.6 マジカルミステリーツアー



昨夜のFacebookの投稿で思い出しました。

底釣り覚えなきや話になんねーなって思い知らされたのが、93JCでしたね。対岸から眺めた決勝で、クマちゃんこと熊谷さんと、もうひとりの会友の底釣りの差を見て、こりゃヤベェ、と。後の方は皆、宙だったかな。

実は前週のプラで、余りにもイレパクな熊谷さんの底釣りにビビり、隣で僕もやったんですよね。なんちゃってな底釣りで。結果は散々でした。ポイント差なんて無いですよ。居る

ヘラを料理する術を知らないんです。教科書では教えてくれない領域があることを、その時思い知らされました。

当時、僕ら等々カー派の、浅いタナにおける短ハリス&セットってのは、それなりに自信がありました。秘匿しなかったこともあり、その後のトーナメントシーンを見ればスタンダードになって行くわけですが、自称ダンゴマンだった僕らはセッターとして括られるのが不満でした。まだ年間レースの優勝者こそホンモノという価値観が根強かった時代でしたし、カタワと言われたくなかった僕らは、勝てる底釣りを模索し、迷路にハマることになります。そのモヤモヤを完全に払拭出来たと自分で思えたのは、一旦釣りから離れた後のことでした。ご存知の方がいらっしゃるかもしれませんが、北城 錦の底釣りゼミってのがそうです。取材を通じて目からウロコでした。

釣りから離れる前も、底釣りですれなりの世界を自分の中で構築したつもりではいましたが、それは錯覚でした。

もちろん、今も錯覚である可能性はあります。明日、新しい理論に転向する可能性は否定できません。

僕の底釣りは、熊谷さんの底釣り理論とは相容れないところも多々あるように思いますし、プロとなった現在の熊谷さんを論じても仕方がないので、とりあえず、僕が見た20年前の「クマちゃんの底釣り」を思い出してみても、いま勝てるトーナメンターはそうは居ないと思いますね。そのくらい、競技で使えるレベルの底釣りって習得率が低い。ま、バブル崩壊以降、泊まり込みで平日の野釣り例会を追いかけられる身分の人は減りましたし、管理釣り



場で、同じ宙でもダンゴはやったことが無い、セットしかやりませんって人も多いわけですから、当然ですね。僕も、浅いタナしか自信がないトーナメント小僧だったので仕方ないんですけど、スッパリ要らない、と切り捨てるのは、人それぞれとはいえ、勿体無いなあと思う一人です。

じゃあ今の僕なら勝てるって言いたいのか？ってツッコミはカンベンして欲しいですが、赤子の手をひねるようなレベル差だったあの日から、どれほどの進歩があったのかは、胸をお借りしてみたい気持ちはありますね。いつか。

まだ熊谷さんも若くて、オープン間もなかった椎の木での例会なんて、底釣りしか釣れないと分かってて、わざわざ僕の隣に移動して来たもんなあ。

年間レースを競ってたんですよ。

かたやイレパク、かたや即死。僕も若かったので、例会終了直後に玉の柄へし折りしました。20年前って、そんな時代でしたね。懐かしいです。

負けた悔しさはいつ晴らすのか、って話だと思っんですよ。釣りはサカナが相手なのは承知の上でね。

山本五十六の名言で、「男の修行」ってのがあります。Facebookでも時折シェアしている方を見かけます。きっとその方は今、キツイメンタルなんだろうなあ、なんて思って眺めるのですが、冷静に自分を鎮める良い言葉だと思います。でも、耐えに耐えた不満を昇華させることなく終わったら、何のための修行か分かりませんので、単なる逃避と日和見のおまじないに過ぎないことになります。山本五十六本人は、選択を迫られ、真珠湾攻撃を成功させ、最後は覚悟を決めて死んで行きますね。男の修行を大往生寸前まで語るような、トボけた人ではありませんでした。

トーナメントの予選は運の占める割合も大きい。だから超有名なスターも落ちる。それは仕方ないって話は、事実だと思いますが、一般参加者にとっては、実は負けて悔しくならなないための方法論でもあるワケです。

確かに運も流れも味方に付けるのも実力の内だと思いますが、そのウェイトが大きい勝負に固執し、タイトルの権威を高めることに手を貸す人達は、結局のところ、傷付きたくない人



達なんだろうな、と僕は思いますね。

看板を背負ったスター達が、予選落ち覚悟で臨むのは、そんな逃げの方法論とは対極のプレッシャーだと思いますから、ブロック内で一緒に落ちた有名人と同レベル、という慰めは、とても失礼だろうと思うんですよ。トーナメントなんてお祭りだ、と言う僕も失礼だと思いますが。

ナリーズでも、例会よりトーナメント優先という会員はけっこう居ます。全然オッケーです。が、いつか自己矛盾に気付く日が来るでしょう。その時に、僕は自分の知る限りの世界は伝えます。基本、個人の遊びですから、手遅れもへったくれもありませんね。

「カッツケをやってはじめて解る底釣りがあり、底釣りをやってはじめて解るカッツケがある」

これは山本五十六ではなく、残念ながら僕の良く言うセリフです。スーパースターでもなんでもないオッサンの。

これが真実かどうかは謎ですが、僕の信念でもあります。それを貫けばこそ、

「食わず嫌いはモッタイナイ」

であり、

悪く言えば、

「あなたが選択し、自ら特化したそのジャンルを、本当に理解しているのかギモン」

となり、

「じゃあ、他も知ればもっとその釣りも釣れるかもよ？」

であるワケです。

「知ったが故の迷い」

は、当然あります。そこを突破出来なきゃ凡人だということです。天才のままで居たい人、現状で満足したい人は、それでいいと思うんですね。価値観は人それぞれですから。ただ、大多数がこの価値観を採用していれば、現状の世界さえ、広過ぎる事態になるでしょう。釣りに限らず、竿の長さもタナもエサもウキもハリスの長さも、全てを縛るトーナメントの出現はあり得ます。もう、迷うことはありません。後はテクニックのみ。与えられた条件で、いかにして高釣果を叩き出すのか。ここまで来ると、実は逆に応用力、いや、基礎力が問われます。ナリーズで言えば、綿貫さんあたりは手ぐすね引いて喜びそうなレギュレーションです



ね。若い人を啓蒙したくて、老体？に鞭打ってトーナメントに挑戦してるワケですからね。

これって実は、初心者に釣りを教えられるかどうかって資質の話なんですよ。自分と同条件じゃないから教えられないってんじゃあ、話にならないワケです。

「エサもサオもウキもハリもイトも、俺様の使ってるメーカーで揃えて出直して来い」的な敷居の高さをたまに聞きます。必死のポーズであって、実は教えられないレベルなんじゃね？と考えると、

「モノ、グル欲しさに、イトあはれ」です。

目隠しして釣り場に連れて行かれる、ミステリーツアーなんて最高ですね。たまたま直近にその釣り場に行っていれば、プラになるのでラッキーですが、プラが奏功するか、裏目に出るかは運次第です。ま、座席のクジにしても、運という要素は最後まで消せないワケですけど、そこまで行って、はじめて解ることがあるのかもしれないね。

2014.9.21 江成 公隆